

なぜ女性は“多様な”介護ネットワークを持つのか？ —介護ネットワークの年齢差・階層差が大きい女性と小さい男性—

大和礼子

(関西大学)

Why Do Women than Men Have More “Varied” Networks of Caring ?

YAMATO, Reiko

要約

女性の介護ネットワークが男性より多様なのは、1人の女性が1人の男性より多様な人や機関をネットワークに含めるからなのか。それとも、男性は年齢や社会階層に関係なく妻を自分の介護者とし、一方女性は、年齢や階層によって誰を含めるかが大きく異なるため、男性全体と女性全体を比べると、女性のほうにより多様な他者が含まれるからなのか。NFR データの分析の結果、両方の説明が当てはまるが、後者の説明力のほうがより大きいことがわかった。つまり、男性は年齢や階層に関係なく妻を自分の介護者としてあげるのに対し、女性は、若年期においては夫を、そして高齢期においては、子夫婦（階層が高くない女性）や専門家（階層が高い女性）を、それぞれあげる傾向があった。このことが女性の回答を全体として多様にしていると思われる。一方、女性があげる項目（人や機関）の1人あたりの平均数は、男性のそれより若干多いが、大きな差はなかった。

Abstract

Precedent researches have confirmed that when people were asked to enumerate anyone whom they can expect to care for them when it is needed, women's responses tend to include more varied people and institutions than men's ones do. What makes this gender difference? The first hypothesis is that each woman enumerates more items than each man does. The second hypothesis is as follows. Women would mention different people and institutions according to their age and social statuses while men, regardless of their age and social statuses, would mention their spouse exclusively. As a result, women's responses would include more varied people and institutions than men's would. In order to test these hypotheses, the NFR data was analyzed. The result showed that although both hypotheses were supported, the second one had stronger effects on the gender differences mentioned above. The results were as follows. Younger women in any socioeconomic strata were more likely to mention their spouse as their potential carer while older women in higher strata were more likely to mention caring professionals, and those in lower strata, to mention their adult children. In contrast, most men, regardless their age and social statuses, enumerated their spouse.

キーワード：ケア、社会階層、ジェンダー

Key words: care, social status, gender

1. はじめに

本稿では、自分で自分自身の日常的世話（移動する、食事をとる、衣服を着脱する、排泄するなど）ができなくなったとき、それを他の人にしてもらうために動員する人間関係を、“介護のネットワーク”と呼ぶ。介護のネットワークを研究する際には、①現実に関護を必要としている人を調査対象として、その人の持つ介護のネットワークを調査する方法と、②介護が必要になった時という状況を想定して、その時誰を頼りにするかを調査する方法のどちらかがとられることが多い⁽¹⁾。本稿では、後者の方法、すなわち“介護が必要という状況を想定して測定されたネットワーク”に焦点をあてる。したがって以下では、“介護（の）ネットワーク”という用語は、特にことわりがない限り、このようにしてとらえられたネットワークを指す。

ところで、このような方法（介護が必要という状況を想定する）によってネットワークをとらえることには、どのような意味があるのだろうか。第1に、このようにしてとらえられた介護ネットワーク（すなわち自分の介護について頼りにする人や機関）には、調査時点での現実の家族関係（特に世話する／されるをめぐる関係）が反映している。したがって、その時点での、世話に関連する家族関係の実態を推測することができる。第2に、このようにしてとらえられた介護ネットワークには、将来自分はどのように介護してもらいたいのかに対するその人の希望や選好が多分に含まれていると考えられる。そして人々の希望や選好は、介護に対する社会意識や世論となり、将来の介護のあり方や介護政策のあり方を予測する材料となる。以上のような2点において、本稿のような介護ネットワークの研究は意味があると考えられる。

2. 問題

介護のネットワークに関しては、近年、多くの研究が行われるようになってきた。その中には、高齢者を対象にしたもの（笹谷 1994; 野辺 1999）もあれば、より若い年齢層の人々を含めたもの（大和 1997a、1997b、2000; 毎日新聞社世論調査部・アメリカンファミリー生命保険会社 1993; 春日井 2000）もある。これらの研究はすべて、介護ネットワークのジェンダー差について、ほぼ一致した傾向を見出している。すなわち自分自身の介護に関して、男性は配偶者頼りであるのに対して、女性は、配偶者のほかに子どもや他の親族、専門機関などより多様な人や機関を頼りにする傾向があるということである。

ところでこの、女性の介護ネットワークの多様性という調査結果に対しては、2つの解釈が可能である。1つめは、1人1人の女性が、1人1人の男性より、多種類の人や機関をネットワークに含めているという解釈である（“1人1人の多様性”説）。もう1つは、女性はその人が置かれた社会状況によって誰をネットワークに含めるかが異なるが、男性はそれぞれの社会状況の違いを越えて配偶者を含めるので、たとえ1人1人がネットワークに含める人や機関の数は男女で変わらなくても、女性全体と男性全体を比べると、女性

図表-1 分析対象者の基本属性

		男性%	女性%	男性(N)	女性(N)
年齢	(本人)				
	28-39歳	16.8	22.0	437	592
	40-49歳	22.4	24.3	582	652
	50-59歳	25.2	26.5	656	711
	60-69歳	23.3	18.2	607	490
	70-77歳	12.3	9.0	320	243
	計			2602	2688
健在の子どもの数	1人	16.3	16.1	423	434
	2人	53.8	54.5	1399	1465
	3人	25.6	23.9	667	643
	4人	3.4	4.3	89	116
	5人以上	1.0	1.1	24	30
	計			2602	2688
学歴	(本人)				
	初等教育	25.2	24.2	640	638
	中等教育	44.1	53.6	1117	1413
	高等教育	30.7	22.1	778	583
	計			2535	2634
	(配偶者)				
	初等教育	24.7	25.7	659	666
	中等教育	46.2	53.3	1232	1379
	高等教育	29.1	21.0	776	544
	計			2589	2667
収入	(本人)				
	～¥399万	37.6	64.1	960	1685
	～¥799万	43.7	28.5	1118	750
	¥800万～	18.7	7.3	478	192
	計			2556	2627
	(配偶者)				
	～¥399万	65.5	40.8	1631	1000
	～¥799万	27.1	41.5	676	1016
	¥800万～	7.4	17.6	184	432
	計			2491	2448
就業上の地位	(本人)				
	経営・役員	8.7	2.2	226	58
	常雇	51.2	15.5	1328	417
	パートタイマー	3.2	21.7	83	583
	派遣	0.3	0.2	8	6
	自営	15.3	3.0	398	80
	家族従業	1.7	10.4	44	278
	内職	0.0	1.9	1	51
	無職	19.6	45.1	508	1209
	計			2596	2682
	(配偶者)				
	経営・役員	2.4	8.3	62	222
	常雇	14.7	49.0	382	1313
	パートタイマー	19.8	3.2	515	87
	派遣	0.3	0.4	7	11
	自営	2.6	16.6	68	444
	家族従業	9.2	1.9	238	51
	内職	1.2	0.1	30	2
	無職	49.9	20.6	1297	552
	計			2599	2682
職種	(本人)				
	専門・技術	11.1	7.5	289	201
	管理	11.0	0.9	286	23
	事務・営業	11.7	11.4	304	305
	販売・サービス	12.7	19.6	331	526
	技能・労務	29.4	12.2	764	327
	農林漁業	4.4	3.1	113	84
	その他	0.1	0.1	2	4
	無職	19.6	45.1	508	1209
	計			2597	2679
	(配偶者)				
	専門・技術	6.2	10.6	162	283
	管理	0.8	10.8	22	289
	事務・営業	10.1	11.7	262	314
	販売・サービス	18.2	10.6	472	284
	技能・労務	11.3	31.0	293	831
	農林漁業	3.3	4.4	86	117
	その他	0.2	0.3	4	7
	無職	49.9	20.6	1297	552
	計			2598	2677

のネットワークには男性のそれより、多種類の人や機関が含まれているという解釈である（“全体としての多様性”説）。どちらの解釈が妥当なのだろうか。

この問いに答えるため、本稿では、1999年に日本家族社会学会が全国を対象に実施した「家族についての全国調査」（通称 NFR 調査）のデータを用いて、28 歳から 77 歳までの男女の介護ネットワークを分析する。まず“全体としての多様性”説を検証するため、介護ネットワークに影響を与える基本的な変数として年齢と社会階層をとりあげ、介護ネットワークの年齢差や階層差にはジェンダーによって異なるパターンが見られるのかどうかを見ていく。次に“1 人 1 人の多様性”説を検証するため、1 人の介護ネットワークに含まれる人や機関の数を、男女で比較する。

このような分析の結果として以下のことを示す。①年齢によって介護ネットワークのあり方は異なるが、その年齢的差異は、女性のほうが男性より大きい、②社会階層（学歴と収入）によって介護ネットワークのあり方は異なるが、その階層的差異についても、女性のほうが男性より大きい、③1 人の女性が介護ネットワークに含める人や機関の数と、1 人の男性のそれを比べると、確かに女性のほうが若干多くの人を含める傾向があるが、その差はそれほど大きくない。そしてこの結果から、④女性の介護ネットワークが多様であるのは、1 人 1 人の女性が、1 人 1 人の男性より、多種類の人や機関をネットワークに含める（“1 人 1 人の多様性”説）ということもあるが、それより、女性は年齢や階層によってネットワークに含める人や機関が異なるが、男性はどの年齢でもどの階層でも配偶者を含めるので、女性全体と男性全体を比べると、女性のネットワークには男性のそれより多種類の人や機関が含まれる（“全体としての多様性”説）からであることを論じる。最後にこのことの含意を考察する。

3. 分析に使用する変数と分析対象者

介護のネットワークを測定するために用いたのは、「家族についての全国調査」の間 30 「あなたは、次のような問題で援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか。それぞれの場合について、あてはまるものに○をつけてください。（○はいくつでも）」の中の「あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき」という質問に対する回答である。選択肢は、「配偶者」「親・兄弟姉妹」「子ども・その配偶者」「その他の親族」「友人や職場の同僚」「近所（地域）の人」「専門家やサービス機関」である。以下では順に、「配偶者」「親キョウダイ」「子夫婦」「他の親族」「友人同僚」「近所の人」「専門家」と表記する。

分析対象は、上記の質問に答えた人のうち「配偶者と子どもがいる人」とする。分析対象者の基本属性は図表・1 に、分析に用いる変数は図表・2 に、示した。

図表-2 分析に用いる変数

従属変数	介護のネットワーク	「配偶者」「親キョウダイ」「子夫婦」「他の親族」「友人同僚」「近所の人」「専門家」のそれぞれを選ぶ／選ばないのダミー変数
独立変数	本人の年齢	① 28～29／30～34／35～39／……／70～74／75～77 ② 28～39／40～49／50～59／60～69／70～77
	本人の学歴	初等教育／中等教育／高等教育
	夫の収入	(年収) ～¥399 万／¥400～799 万／¥800 万～

4. 分析結果

(1) 介護のネットワークには誰が含まれるのか？

まず、分析対象者全体について、男女別に、選択肢のそれぞれの項目を介護のネットワークに含めた人の割合を見ていこう。図表-3によると、男女とも、介護のネットワークに含まれる割合が多い項目は、1 番目が配偶者、以下多い順に、子夫婦、専門家、親キョウダイとなる。男女とも、親キョウダイより専門家がわずかであるが多いことが注目される。また、他の親族、友人同僚、近所の人をネットワークに含めた人は、男女ともほとんどいない。介護をしてもらうということは、大きな肉体的、精神的、そして物質的負担を介護者に長期間かけるものであるから、現代日本社会では、介護のネットワークはごく近い親族と専門機関に限られているのである。そこで以下では、配偶者、親キョウダイ、子夫婦、専門家の 4 項目（図表-3 の数字が太字の項目）について分析を行う。

これらの 4 項目についてジェンダー差を見ると、配偶者を介護ネットワークに含める人は男性の方に多いが、他の 3 項目（親キョウダイ、子夫婦、専門家）についてはいずれも、女性の方が多くネットワークに含めている。このことから全体として、男性は配偶者頼りであるのに対して、女性はいり多様な介護のネットワークを持つという先行研究の知見は、このデータでも確かめられた。

図表-3 介護のネットワークとして各項目を選んだ人の割合

	男 (%)	女 (%)	Chi-sq.	男計 (人)	女計 (人)
配偶者	83.2	64.0	249.06***	2578	2660
親キョウダイ	17.3	26.3	62.35***	2578	2660
子夫婦	32.5	47.6	124.01***	2578	2660
他の親族	2.8	2.6	.28	2578	2660
友人同僚	0.9	2.2	13.26***	2578	2660
近所の人	1.4	1.7	.78	2578	2660
専門家	20.1	28.5	49.75***	2578	2660

(*** p<.001 ** p<.01 * p<.05)

ここでの分析で明らかになったことは、次の 2 点である。

①介護のネットワークとして比較的多くの人があげるのは、夫婦・親子・兄弟姉妹といっ

たごく近い親族と、専門家であり、この点については男女とも同じである。

②そのなかでも、男性は配偶者中心であり、それと比較して女性はより多様な介護ネットワークを持つ。

それではこの第2点めに指摘したようなジェンダー差は、年齢によってどう異なるのだろうか。

(2) 介護ネットワークの年齢差は、男性と女性ではどのように異なるのか？

まず図表-4で、配偶者を介護ネットワークに含める人の割合が年齢によってどう変わるのかについて見てみよう。男女ともにその割合は年齢が上がるにつれて減っていく。ただし55歳以降は、男性では横ばいに近くなるのに対して、女性ではより急激に減る傾向が見られる。その結果、55歳以降で男女差はより拡大し、男性では70歳代になっても8割近くの人が妻をネットワークに含めているのに対して、女性では70歳以上で夫をネットワークに含める人は5割に達しなくなる。

次に図表-5で、親キョウダイについて見てみよう。男女ともに20～30歳代では親キョウダイをネットワークに含める人は比較的多いが（特に女性では6～5割に達する）、年齢とともに減っていき、特に女性におけるその減少が急である。50歳以上になると男女差はほとんどなくなり、60歳を越えると男女とも1割を切るようになる。

次に図表-6で、子夫婦について見てみよう。親キョウダイとは対照的に、子夫婦を介護のネットワークに含める人は、男女とも年齢が上がるにつれて増加していく。

最後に図表-7で専門家について見ると、男女ともに、年齢による有意な差は見られず、20歳代を除くすべての年齢層において男性は2割前後、女性は3割前後の人が専門家を介護のネットワークに含めている。

今まで見てきた配偶者、親キョウダイ、子夫婦、専門家の折れ線グラフを、1つのグラフに重ね合わせるとどのようなことがわかるだろうか。図表-8と図表-9は、男性と女性のそれぞれについてそれを行ったものである（ただし見やすくするために、年齢による差がほとんどなかった専門家の線は省略してある。そこで、男性についての図表-8では2割前後の所に、女性についての図表-9では3割前後の所に、専門家の線があることを念頭において、図表を見ていただきたい）。

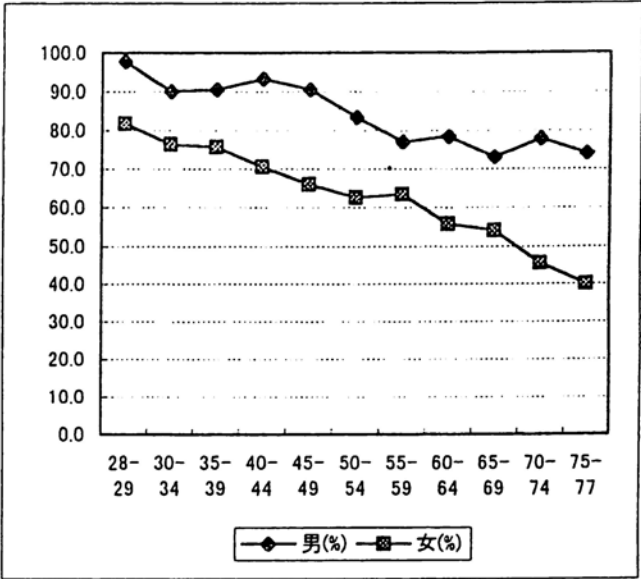
図表-8と図表-9を見比べると、まず目につくのは、図表-8の男性の介護ネットワークにおける配偶者の重要性である。各年齢を通じて、配偶者は他の3項目を圧倒的に引き離して高い割合でネットワークに含められている。それに対して図表-9の女性では、50歳を越えると子夫婦の線が配偶者の線に近づき、60歳を越えると両者の位置関係は逆転する——すなわち女性では60歳を越えると配偶者がいるにもかかわらず配偶者より子夫婦を選択する人が増えるのである。

また全体的な印象として、男性（図表-8）ではそれぞれの線に見られる上下の変化は緩

図表-4 配偶者(男女、年齢別)

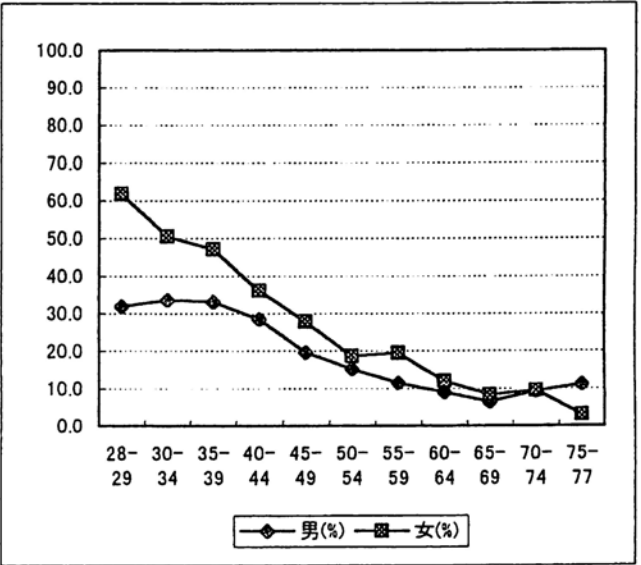
年齢	男(%)	女(%)	男計(人)	女計(人)
28-29	97.7	81.7	44	60
30-34	90.0	76.3	170	224
35-39	90.5	75.6	221	303
40-44	93.4	70.4	257	291
45-49	90.6	66.0	320	353
50-54	83.3	62.5	354	387
55-59	77.0	63.4	296	317
60-64	78.5	55.8	288	267
65-69	73.1	54.0	312	215
70-74	77.9	45.5	235	178
75-77	74.1	40.0	81	65
Chi-sq.	97.7***	106.7***		

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05
(以下同じ)



図表-5 親の年代(男女、年齢別)

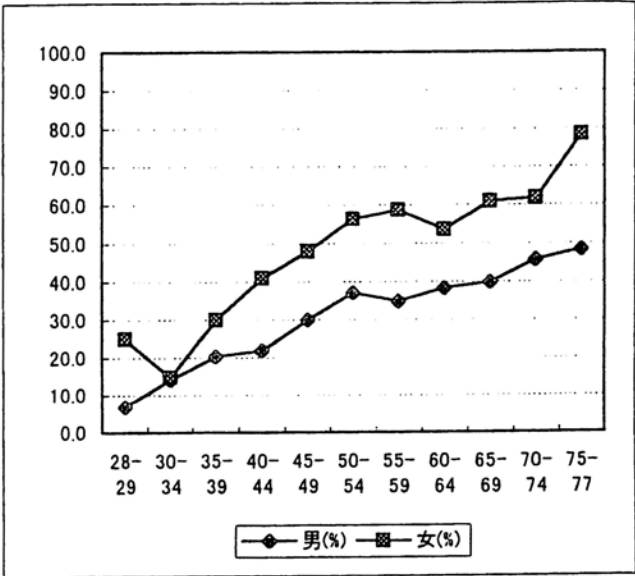
年齢	男(%)	女(%)	男計(人)	女計(人)
28-29	31.8	61.7	44	60
30-34	33.5	50.4	170	224
35-39	33.0	47.2	221	303
40-44	28.4	36.1	257	291
45-49	19.7	27.8	320	353
50-54	15.3	18.6	354	387
55-59	11.5	19.6	296	317
60-64	9.0	12.0	288	267
65-69	6.4	8.4	312	215
70-74	9.4	9.6	235	178
75-77	11.1	3.1	81	65
Chi-sq.	159.9***	316.3***		



図表-6 子夫婦(男女、年齢別)

年齢	男(%)	女(%)	男計(人)	女計(人)
28-29	6.8	25.0	44	60
30-34	14.1	14.7	170	224
35-39	20.4	30.0	221	303
40-44	21.8	40.9	257	291
45-49	30.0	47.9	320	353
50-54	37.0	56.3	354	387
55-59	34.8	58.7	296	317
60-64	38.2	53.6	288	267
65-69	39.7	60.9	312	215
70-74	45.5	61.8	235	178
75-77	48.1	78.5	81	65

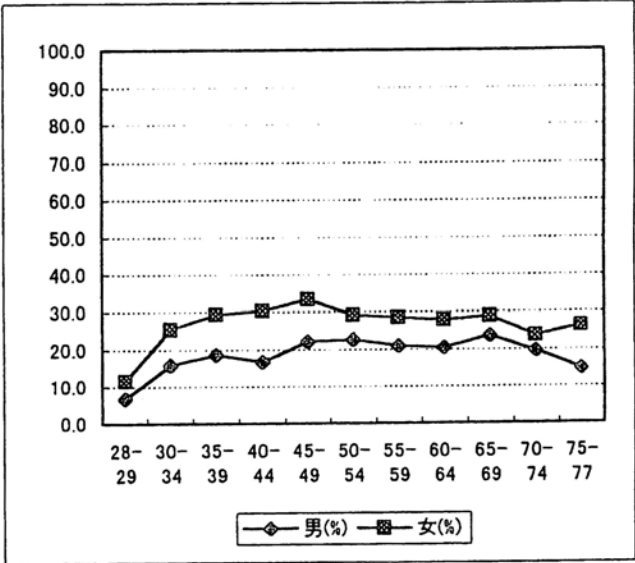
Chi-sq. 111.5*** 237.8***



図表-7 専門家(男女、年齢別)

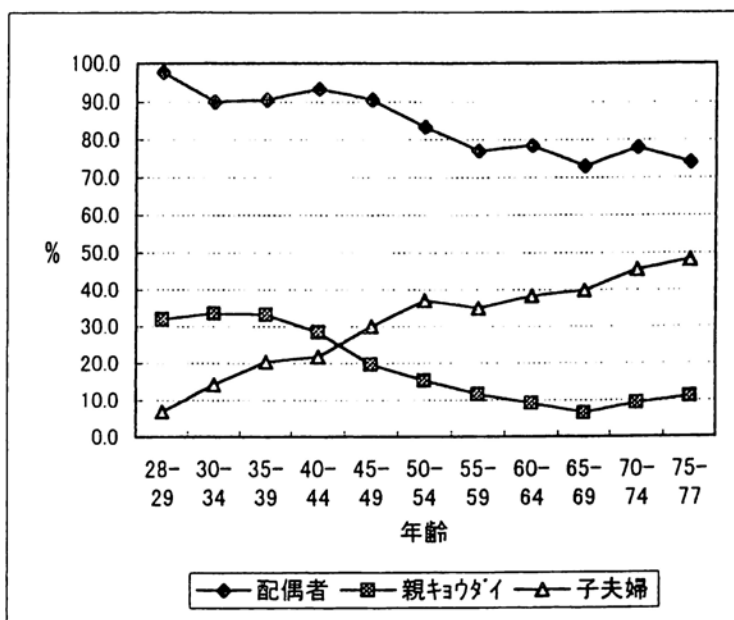
年齢	男(%)	女(%)	男計(人)	女計(人)
28-29	6.8	11.7	44	60
30-34	15.9	25.4	170	224
35-39	18.6	29.4	221	303
40-44	16.7	30.2	257	291
45-49	22.2	33.4	320	353
50-54	22.6	29.2	354	387
55-59	20.9	28.4	296	317
60-64	20.5	27.7	288	267
65-69	23.7	28.8	312	215
70-74	19.6	23.6	235	178
75-77	14.8	26.2	81	65

Chi-sq. 15.3 16.6



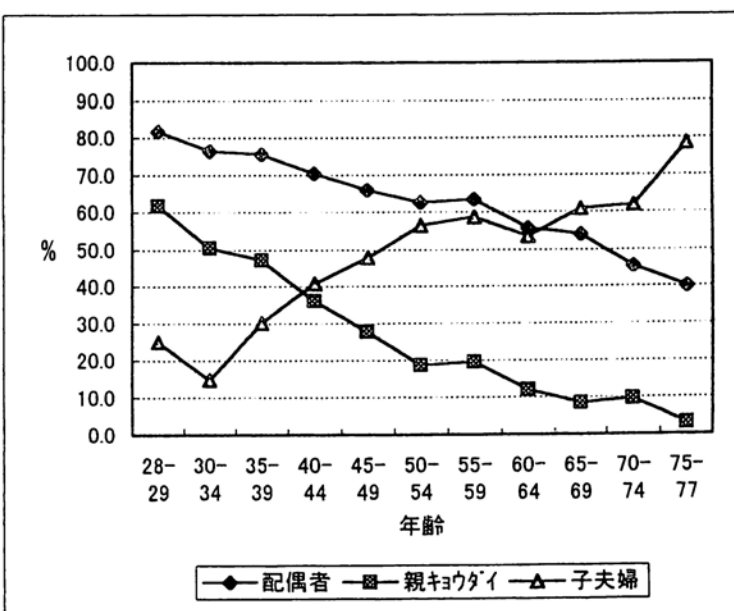
図表-8 男性の介護のネットワーク(年齢別)

年齢	配偶者 (%)	親キョウダイ (%)	子夫婦 (%)
28-29	97.7	31.8	6.8
30-34	90.0	33.5	14.1
35-39	90.5	33.0	20.4
40-44	93.4	28.4	21.8
45-49	90.6	19.7	30.0
50-54	83.3	15.3	37.0
55-59	77.0	11.5	34.8
60-64	78.5	9.0	38.2
65-69	73.1	6.4	39.7
70-74	77.9	9.4	45.5
75-77	74.1	11.1	48.1



図表-9 女性の介護のネットワーク(年齢別)

年齢	配偶者 (%)	親キョウダイ (%)	子夫婦 (%)
28-29	81.7	61.7	25.0
30-34	76.3	50.4	14.7
35-39	75.6	47.2	30.0
40-44	70.4	36.1	40.9
45-49	66.0	27.8	47.9
50-54	62.5	18.6	56.3
55-59	63.4	19.6	58.7
60-64	55.8	12.0	53.6
65-69	54.0	8.4	60.9
70-74	45.5	9.6	61.8
75-77	40.0	3.1	78.5



やかであるが、女性（図表・9）では各線の上下の変化幅が大きい。このことは、男性では配偶者という存在があるために他の項目を選択する人の割合が小さく、したがって線の上下の変化幅も小さい。一方女性においては、男性にとっての配偶者にあたるような、すべての年齢層を通じて自分の介護の中心的担い手として期待できるような人は存在せず、そのために配偶者以外の項目を選ぶ人が多く、しかもどの項目を選ぶかについて年齢によって大きく異なるということを示している。

ここまでの分析でわかったことは、次の2点である。

- ①男性は介護のネットワークの年齢差が小さく、特に**配偶者**が各年齢を通じて、他の項目を圧して中心的な位置を占める。
- ②女性は介護のネットワークの年齢差が大きく、特に若年層は**配偶者**、高年層になると**子夫婦**へと介護のネットワークの中心が変化する。

この第2点めから、女性は年齢による親族状況に応じて、自分の介護を期待できる相手をそのつど探し、そのつど選び直しているというように見える。それが女性の多様な介護ネットワークとして表れているのではないだろうか。

（3）何を社会階層の指標とするか？

前の項では、介護ネットワークの年齢差が、男女でどのように異なるのかを見た。そこで次に、介護ネットワークの階層差に注目し、それが男女でどのように異なるのかについて見ていこう。

分析に入る前に、何を階層の指標として用いるかについて述べておきたい。社会階層の代表的指標として、学歴、収入、職業などがある。さらにそれぞれについて、①本人の学歴、収入、職業を見るべきなのか（地位独立モデル）、②男性においては本人のそれを、女性においては夫のそれを見るべきなのか（地位借用モデル）、③男女とも夫婦のうちより高い方のそれを見るべきなのか（地位優越モデル）、④夫婦の平均値を見るべきなのか（地位分有モデル）といった議論がある（赤川 2000）。大和礼子（2000）によると、介護ネットワークの階層差を分析するにあたって、学歴に関しては、男女とも本人の学歴を用いることにより、明確な階層差が表れた。しかし収入や職業については、女性では女性本人のそれよりは夫のそれを用いたほうがより明確な階層差が表れた。このような知見にしたがって本稿では、男性については本人の学歴と収入、女性については本人の学歴と夫の収入をそれぞれ階層の指標として、介護ネットワークの階層差を見ることを試みる。したがって本稿では、学歴に関しては地位独立モデル、収入に関しては地位借用モデルを採用することになる⁽²⁾。

図表-10 男性:本人の学歴と本人の収入の関係

	本人の収入			合計	Chi-sq.
	～ ¥ 399	～ ¥ 799	¥ 800～		
男 初等教育	67.1% (420)	25.6% (160)	7.3% (46)	100% (626)	411.639 ***
中等教育	33.3% (365)	50.4% (552)	16.3% (178)	100% (1095)	
高等教育	18.6% (143)	48.8% (375)	32.6% (250)	100% (768)	
合計	37.3% (928)	43.7% (1087)	19.0% (474)	100% (2489)	

図表-11 女性:本人の学歴と夫の学歴・収入の関係

	夫の学歴			合計	Chi-sq.
	初等教育	中等教育	高等教育		
女 初等教育	69.9% (441)	25.8% (163)	4.3% (27)	100% (631)	1448.831 ***
中等教育	12.7% (179)	64.4% (906)	22.9% (322)	100% (1407)	
高等教育	3.4% (20)	24.7% (144)	71.9% (419)	100% (583)	
合計	24.4% (640)	46.3% (1213)	29.3% (768)	100% (2621)	
	夫の収入			合計	Chi-sq.
	～ ¥ 399	～ ¥ 799	¥ 800～		
女 初等教育	70.9% (406)	23.6% (135)	5.6% (32)	100% (573)	358.730 ***
中等教育	36.3% (470)	46.2% (599)	17.5% (227)	100% (1296)	
高等教育	19.4% (104)	49.0% (263)	31.7% (170)	100% (537)	
合計	40.7% (980)	41.4% (997)	17.8% (429)	100% (2406)	

ちなみに図表-10 は男性における本人の学歴と収入との関連、そして図表-11 は女性における本人の学歴と夫の学歴・収入との関連を示したものである。表は示さなかったが、年齢層ごとに分けて同様の分析を行った結果も、これとほぼ同じであった。これらの表から、夫と妻の学歴については、対角線上のセルが一番多くなることから、両者は強く相関していることが確かめられた。一方、夫婦の学歴と夫の収入との関連については、対角線上のセルが一番多くなるという現象は、男女ともに初等・中等教育修了者には見られるが、高等教育修了者には見られない。すなわち高等教育修了者では、収入が高い人（¥800 万～）が 1 番多いわけではなく、中等教育修了者と同様、収入が中程度の人（¥400～799 万）が 1 番多いのである。ただし高等教育修了者で収入が低い人（～¥399 万）は明らかに他より

少ない。したがってこのことから、学歴が高くなることは、収入を中程度（¥400～799 万）まで押し上げる効果はあるが、それ以上の収入をもたらすとは限らないといえる。

（4）介護ネットワークの学歴差は、男性と女性ではどのように異なるのか？

このようなことを念頭に置きつつ、まずはじめに、介護ネットワークの学歴差に関する分析結果を見ていこう。図表・12、図表・13、図表・14、図表・15 はそれぞれ、男性が配偶者、親キョウダイ、子夫婦、専門家のそれぞれを介護ネットワークに含める割合の、年齢による違いを、学歴別に見たものである⁽³⁾。男性に関するこれら 4 つの図表を比べると、学歴差が最も大きいのは専門家（図表・15）を含めるか否かであり、学歴が高い方が専門家を含める人が多い。次いで配偶者（図表・12）についても、学歴が高い方がより多く配偶者を含める傾向が弱いながら見られる。親キョウダイ（図表・13）については、30 歳代まではやや学歴差が見られるが（学歴が高い方が親キョウダイを含める人が多い）、40 歳以降についてはそのような差はない。子夫婦（図表・14）については、いずれの年齢層でも学歴差は見られない。以上から男性においては、学歴が高い方が介護のネットワークは多様でかつ豊富であるといえるが、その差はそれほど大きくはない。

次に図表・16、図表・17、図表・18、図表・19 は、女性について同様の分析を行った結果である。男性の結果と比べると、女性の方が介護のネットワークの学歴差は大きい。最も目立つのは専門家（図表・19）における差であり、高等教育修了者では 50 歳を越えると約 5 割かそれ以上の人がネットワークに専門家を含めているが、初等教育修了者ではそのような人はどの年齢層でも 2 割かそれ以下である。次に目立つのは、子夫婦（図表・18）におけるそれで、男性では学歴差がまったく見られなかったのに対して、女性では 60 歳以降に差があらわれる。すなわち高等教育修了者では 60 歳以降、子夫婦を介護のネットワークに含める人が減少し、70 歳代ではついに 5 割を切る。一方、初等教育修了者では 60 歳以降も子夫婦をネットワークに含める人は増えつづけ、70 歳代では 72%に達する。配偶者（図表・16）や親キョウダイ（図表・17）については、男性とよく似た傾向を示し、配偶者をネットワークに含める人は学歴が高い方がやや多く⁽⁴⁾、親キョウダイについては学歴差は見られない。

以上からわかったことは、次の 3 点である。

- ①男女ともに介護のネットワークは、学歴が高い方が多様で豊富である。
- ②特に男女とも学歴が高い方が、専門家を介護ネットワークに含める人が多い⁽⁵⁾。
- ③このような学歴差は男性では小さく、女性では大きい。

これらのことは、次に示す図表でさらに明確になる。図表・20、図表・21、図表・22 は、男性について、学歴別に、配偶者、親キョウダイ、子夫婦、専門家の 4 本の線を、1 つの図表に重ねたものである。これら 3 つの図表を見比べると、学歴の違いにも関わらず、その全体的な折れ線の布置が 3 つの図表で非常によく似ていることがわかる。つまり男性の

介護ネットワークのあり方（特にその年齢的差異のパターン）は、学歴による違いがほとんどないのである。唯一めだつ違いといえ、図表-22 の高等教育終了の男性で、専門家の線と子夫婦の線が重なっていることである。つまり学歴の高い男性は、他の男性に比べて、介護ネットワークに専門家を含める人がより多いのである。

次に図表-23、図表-24、図表-25 は、女性について同様の分析を行った結果である。これらを見ると、折れ線の布置パターンが、3 つの図表で大きく異なっていることが見てとれる。つまり女性では男性に比べて、学歴差が大きいのである。まず図表-23 で初等教育終了者の介護ネットワークを見ると、配偶者の線と子夫婦の線が 50 歳代以下と 60 歳代以上で逆転している点に特徴がある。つまりこの層の女性は、介護を期待するおもな相手が若年層では配偶者、高年層では子夫婦というように異なり、高齢期においては子夫婦がおもな介護者として期待されている。専門家の線は一貫して低い位置にある。

次に図表-24 で中等教育修了者について見ると、配偶者の線と子夫婦の線が 50 歳代で重なり、以後 70 歳代までその状態が続く。つまりこの階層の女性にとって、40 歳代まではおもに配偶者に介護を期待するが、50 歳代には子夫婦の比重が高まり、それ以降は配偶者と子夫婦の両方が介護の担い手としておもに期待されるようになる。また専門家を含める人も年齢とともに緩やかに増加するが、配偶者や子夫婦の位置にまでは達しない。

最後に図表-25 で高等教育修了者についてみると、専門家の位置が若い頃から比較的高く、年齢が上がるにしたがってさらに高くなり、50 歳代で子夫婦とほぼ同じ高さの 5 割に達し、60 歳代で子夫婦の線を追い抜き、さらに 70 歳代では配偶者の線をも追い抜く。その結果 70 歳代では、専門家をネットワークに含める人の割合が 56%を占め、配偶者を含める人より多くなる。つまり高学歴の女性では、専門家に介護を期待する人が非常に多いのである。それとは対照的に、子夫婦に介護を期待する人は、特に高齢層において相対的に低い⁽⁶⁾。

以上の分析から、次の 2 点がわかった。

- ①男性においては介護のネットワークの中心は**配偶者**であり、年齢差、学歴差は小さい。
- ②女性においては、介護のネットワークのあり方は年齢によって異なり、しかもその学歴差が大きい。すなわち女性の介護ネットワークの中心は、初等教育終了者では年齢とともに**〈配偶者→子夫婦〉**へと変化する。中等教育修了者では**〈配偶者→配偶者+子夫婦〉**へと変化する。そして高等教育修了者では**〈配偶者→専門家〉**へと変化する。子夫婦の重要性は他の階層に比べて相対的に低い。

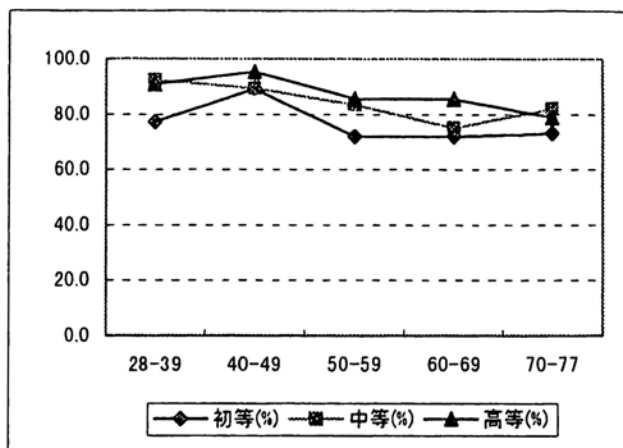
この第 2 点めから女性は、自分の階層的状況に応じて可能な人を、介護者として選んでいるといえないだろうか。

(5) 介護ネットワークの夫の収入による差は、男性と女性でどのように異なるのか？

最後に、今まで見てきた学歴に関する分析と同様の分析を、収入について行った結果を

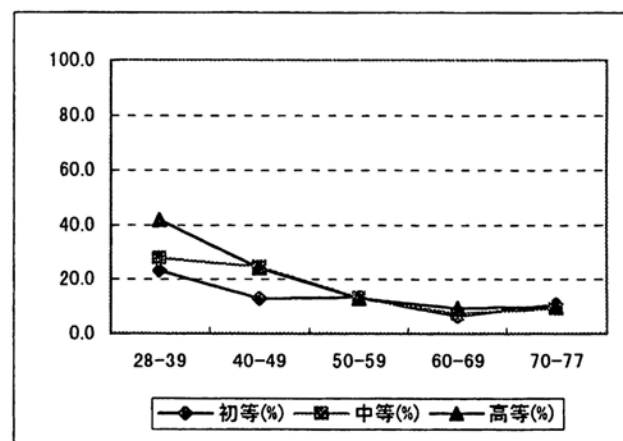
図表-12 男:配偶者を含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	76.9	92.1	90.8	3.49
40-49	88.9	89.2	95.3	6.66 *
50-59	71.7	83.2	85.5	12.53 **
60-69	71.8	74.9	85.5	8.09 *
70-77	73.1	81.8	78.7	2.47
	計(人)	計(人)	計(人)	
28-39	13	227	184	(図表13 ~15につい ても同じ)
40-49	54	278	232	
50-59	166	292	179	
60-69	238	231	117	
70-77	167	77	61	



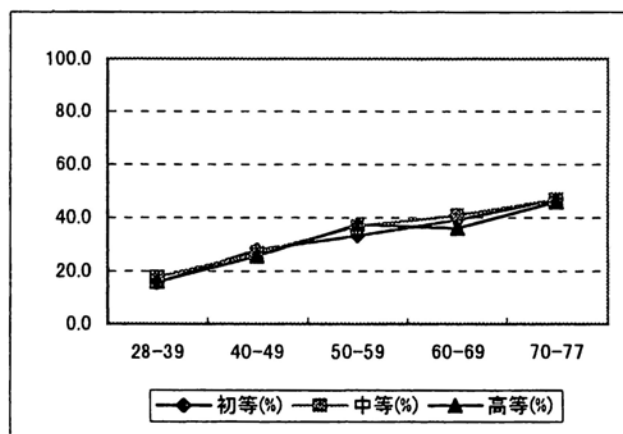
図表-13 男:親キョウタイを含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	23.1	27.8	41.8	9.71 **
40-49	13.0	24.5	24.1	3.54
50-59	13.3	13.0	12.8	0.01
60-69	6.3	7.4	9.4	1.11
70-77	10.8	9.1	9.8	0.17



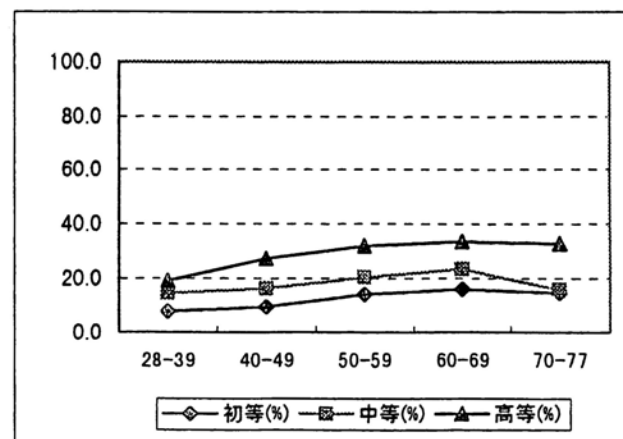
図表-14 男:子夫婦を含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	15.4	17.6	15.8	0.27
40-49	27.8	26.6	25.4	0.17
50-59	33.1	36.6	37.4	0.80
60-69	39.1	40.7	35.9	0.75
70-77	46.7	46.8	45.9	0.01



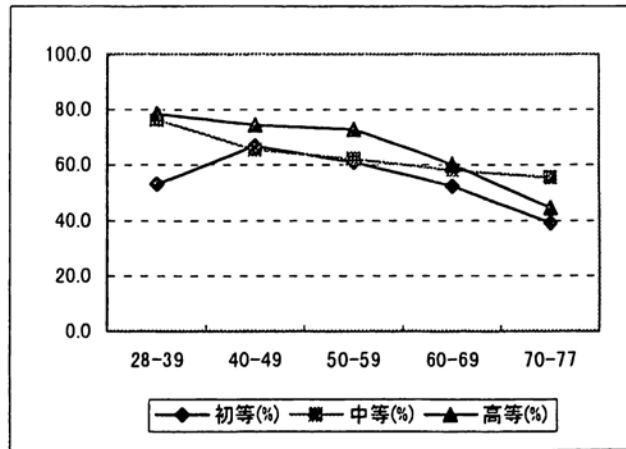
図表-15 男:専門家を含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	7.7	14.5	19.0	2.22
40-49	9.3	16.2	27.2	13.82 **
50-59	13.9	20.2	31.8	17.16 ***
60-69	16.0	23.4	33.3	13.86 **
70-77	14.4	15.6	32.8	10.64 **



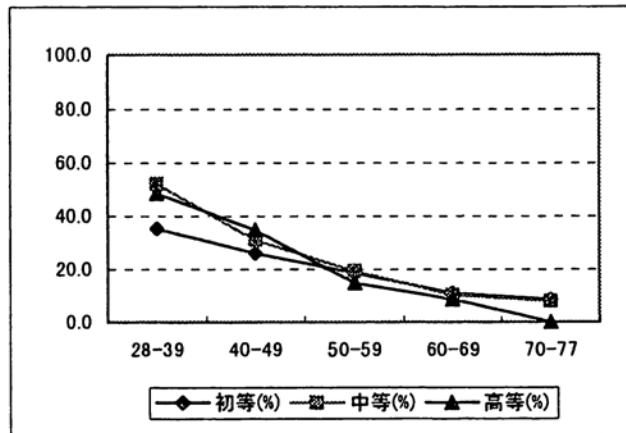
図表-16 女:配偶者を含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	52.9	76.2	78.3	5.67
40-49	66.7	65.2	74.2	4.92
50-59	60.7	62.0	72.6	4.37
60-69	52.3	57.9	60.0	1.68
70-77	39.1	55.3	44.4	5.37
	計(人)	計(人)	計(人)	
28-39	17	323	244	(図表17 ~19につい ても同じ)
40-49	69	368	198	
50-59	173	418	95	
60-69	218	216	35	
70-77	151	76	9	



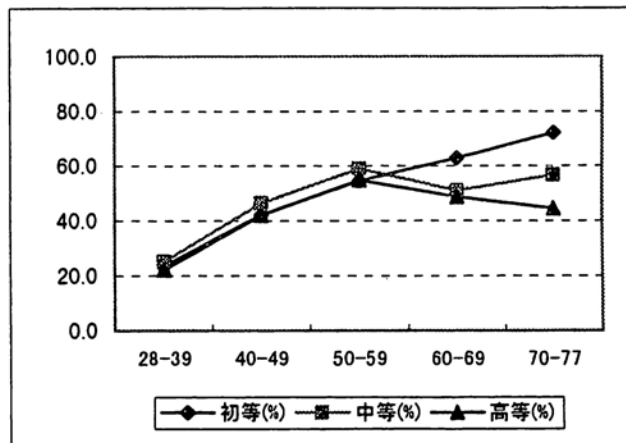
図表-17 女:親をウダイを含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	35.3	52.0	48.4	2.26
40-49	26.1	31.0	34.8	2.00
50-59	18.5	19.4	14.7	1.11
60-69	11.0	10.2	8.6	0.22
70-77	8.6	7.9	0.0	0.85



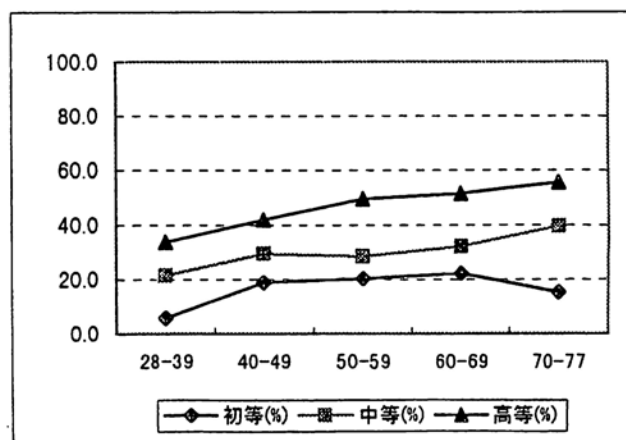
図表-18 女:子夫婦を含めた人(学歴別)

	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	23.5	25.1	22.1	0.67
40-49	42.0	46.2	41.9	1.13
50-59	54.3	58.9	54.7	1.28
60-69	62.8	50.9	48.6	7.18 *
70-77	72.2	56.6	44.4	7.45 *



図表-19 女:専門家を含めた人(学歴別)

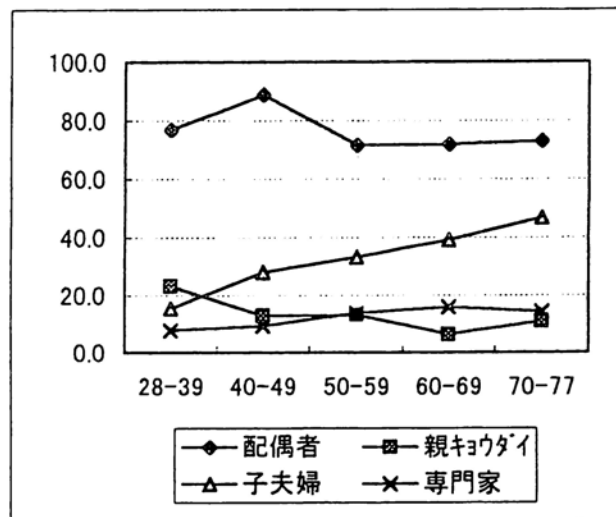
	初等(%)	中等(%)	高等(%)	Chi-sq.
28-39	5.9	21.4	33.6	14.51 **
40-49	18.8	29.3	41.9	15.60 ***
50-59	20.2	28.5	49.5	25.67 ***
60-69	22.0	31.9	51.4	14.68 **
70-77	15.2	39.5	55.6	20.87 ***



図表-20 介護のネットワーク（男、初等教育）

	配偶者 (%)	親キョウタイ (%)	子夫婦 (%)	専門家 (%)
28-39	76.9	23.1	15.4	7.7
40-49	88.9	13.0	27.8	9.3
50-59	71.7	13.3	33.1	13.9
60-69	71.8	6.3	39.1	16.0
70-77	73.1	10.8	46.7	14.4

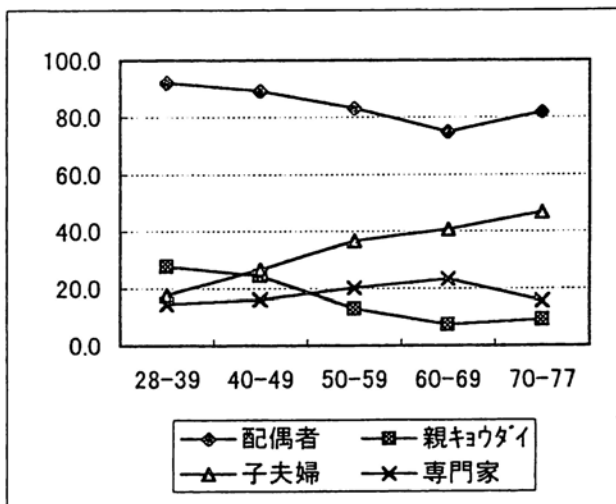
	計(人)
28-39	13
40-49	54
50-59	166
60-69	238
70-77	167



図表-21 介護のネットワーク（男、中等教育）

	配偶者 (%)	親キョウタイ (%)	子夫婦 (%)	専門家 (%)
28-39	92.1	27.8	17.6	14.5
40-49	89.2	24.5	26.6	16.2
50-59	83.2	13.0	36.6	20.2
60-69	74.9	7.4	40.7	23.4
70-77	81.8	9.1	46.8	15.6

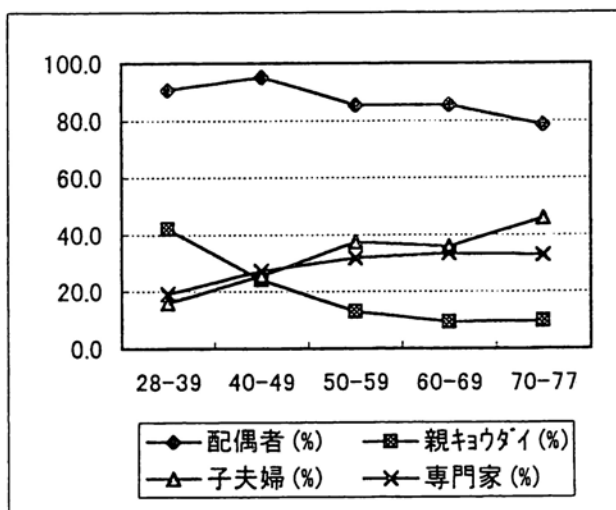
	計(人)
28-39	227
40-49	278
50-59	292
60-69	231
70-77	77



図表-22 介護のネットワーク（男、高等教育）

	配偶者 (%)	親キョウタイ (%)	子夫婦 (%)	専門家 (%)
28-39	90.8	41.8	15.8	19.0
40-49	95.3	24.1	25.4	27.2
50-59	85.5	12.8	37.4	31.8
60-69	85.5	9.4	35.9	33.3
70-77	78.7	9.8	45.9	32.8

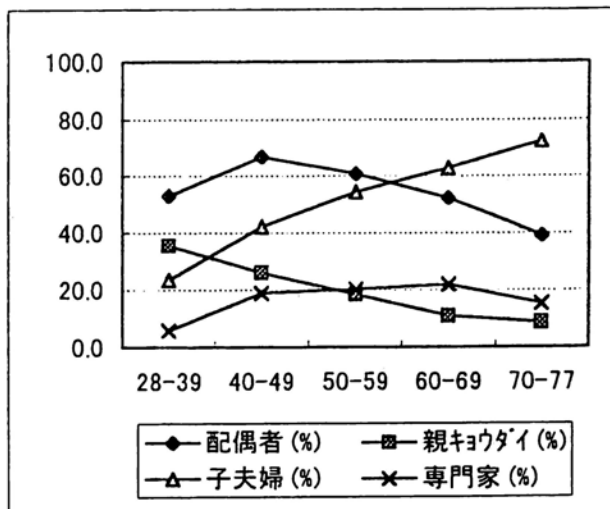
	計(人)
28-39	184
40-49	232
50-59	179
60-69	117
70-77	61



図表-23 介護のネットワーク（女、初等教育）

	配偶者 (%)	親キョウタイ (%)	子夫婦 (%)	専門家 (%)
28-39	52.9	35.3	23.5	5.9
40-49	66.7	26.1	42.0	18.8
50-59	60.7	18.5	54.3	20.2
60-69	52.3	11.0	62.8	22.0
70-77	39.1	8.6	72.2	15.2

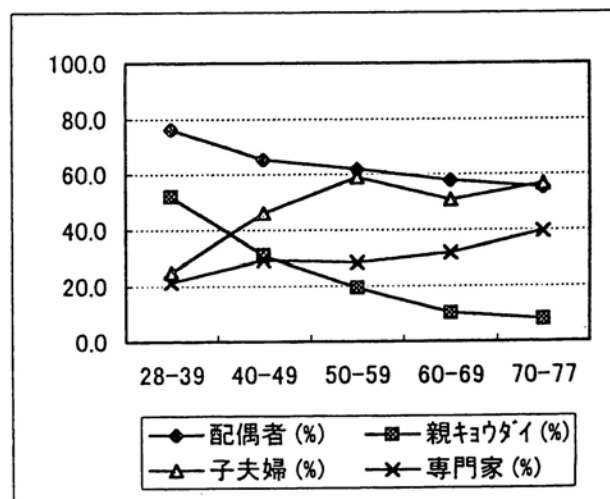
	計(人)
28-39	17
40-49	69
50-59	173
60-69	218
70-77	151



図表-24 介護のネットワーク（女、中等教育）

	配偶者 (%)	親キョウタイ (%)	子夫婦 (%)	専門家 (%)
28-39	76.2	52.0	25.1	21.4
40-49	65.2	31.0	46.2	29.3
50-59	62.0	19.4	58.9	28.5
60-69	57.9	10.2	50.9	31.9
70-77	55.3	7.9	56.6	39.5

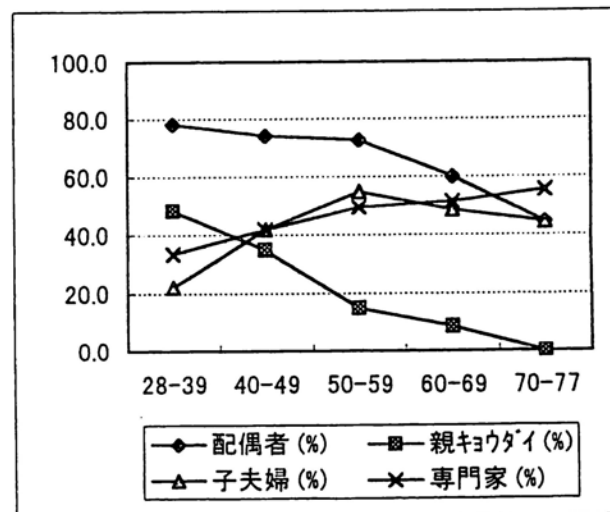
	計(人)
28-39	323
40-49	368
50-59	418
60-69	216
70-77	76



図表-25 介護のネットワーク（女、高等教育）

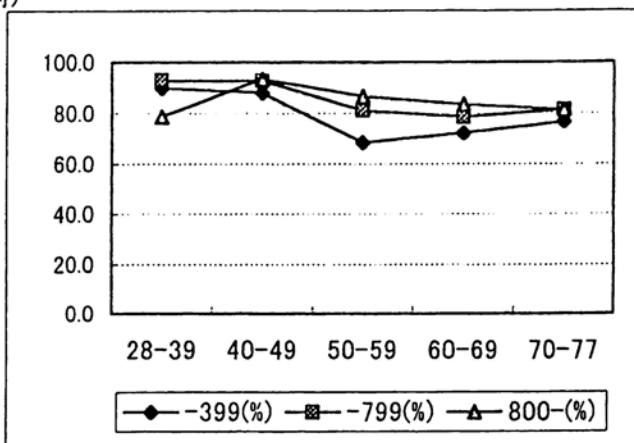
	配偶者 (%)	親キョウタイ (%)	子夫婦 (%)	専門家 (%)
28-39	78.3	48.4	22.1	33.6
40-49	74.2	34.8	41.9	41.9
50-59	72.6	14.7	54.7	49.5
60-69	60.0	8.6	48.6	51.4
70-77	44.4	0.0	44.4	55.6

	計(人)
28-39	244
40-49	198
50-59	95
60-69	35
70-77	9



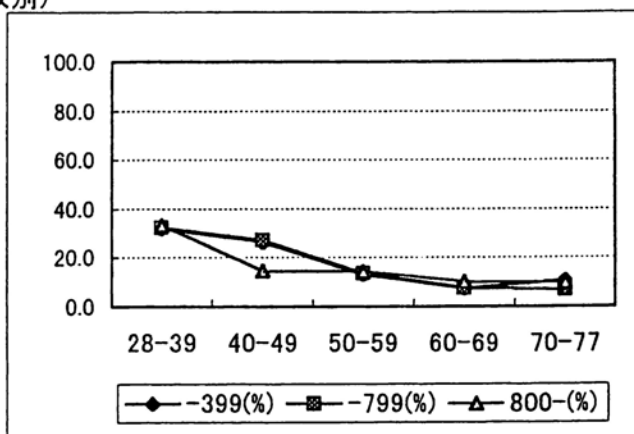
図表-26 男:配偶者を含めた人 (本人の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	89.7	92.8	78.8	7.32 *
40-49	87.9	92.7	93.5	2.91
50-59	68.5	81.1	86.5	18.01 ***
60-69	72.0	78.4	83.5	5.75
70-77	76.6	81.4	81.4	2.28
	計(人)	計(人)	計(人)	
28-39	116	279	33	(図表27 ~29につい ても同じ)
40-49	99	328	138	
50-59	146	275	215	
60-69	343	171	79	
70-77	244	59	10	



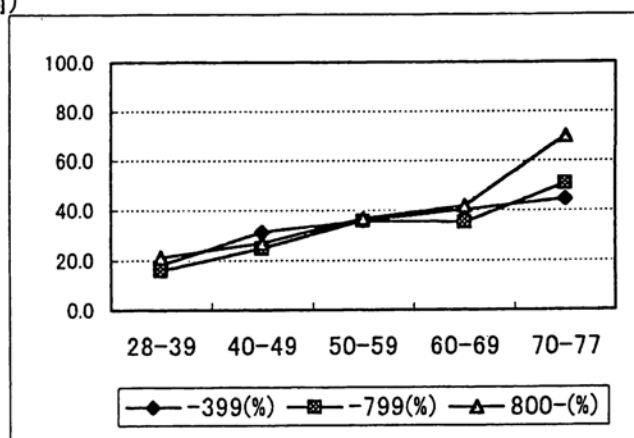
図表-27 男:親キョウタイを含めた人 (本人の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	31.9	32.3	33.3	0.02
40-49	26.3	27.1	14.5	8.91 *
50-59	13.0	13.5	14.4	0.17
60-69	7.3	7.6	10.1	0.73
70-77	10.7	6.8	10.0	0.80



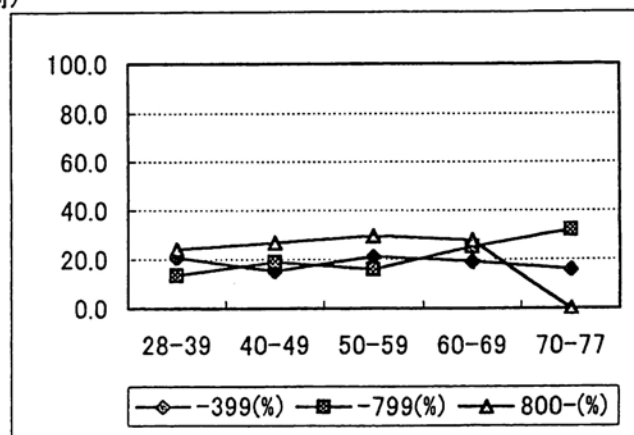
図表-28 男:子夫婦を含めた人 (本人の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	18.1	15.8	21.2	0.81
40-49	31.3	25.0	26.8	1.56
50-59	35.6	35.6	36.7	0.08
60-69	40.2	35.1	41.8	1.57
70-77	44.7	50.8	70.0	2.99



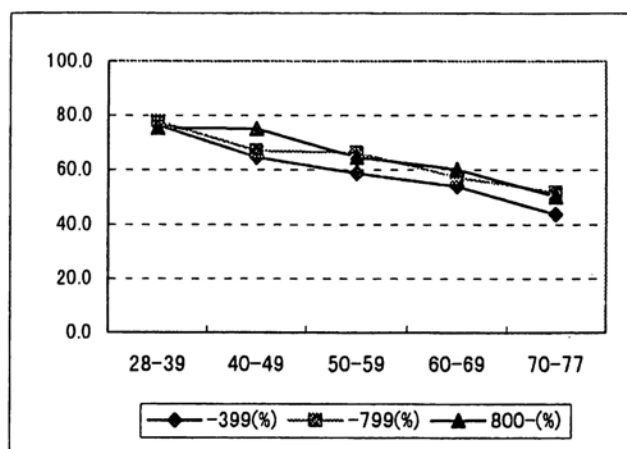
図表-29 男:専門家を含めた人 (本人の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	20.7	13.6	24.2	4.62
40-49	15.2	18.9	26.8	5.65
50-59	21.2	16.0	29.8	13.43 **
60-69	19.2	25.1	27.8	4.07
70-77	16.0	32.2	0.0	10.63 **



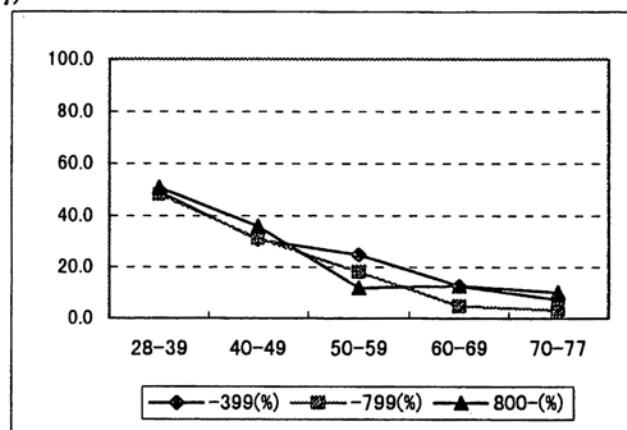
図表-30 女:配偶者を含めた人 (夫の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	76.2	77.6	75.4	0.24
40-49	64.5	66.9	74.8	4.17
50-59	58.6	66.1	64.4	3.02
60-69	53.8	57.1	60.0	0.76
70-77	43.6	51.6	50.0	0.80
	計(人)	計(人)	計(人)	
28-39	151	322	69	(図表31 ~33につい ても同じ.)
40-49	138	293	151	
50-59	220	257	160	
60-69	301	105	40	
70-77	179	31	10	



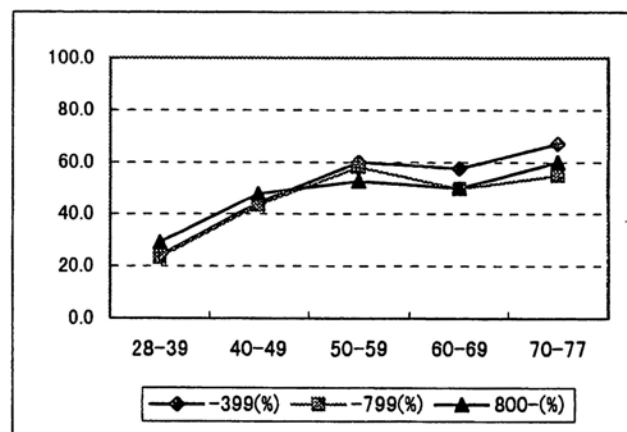
図表-31 女:親キョウタイを含めた人 (夫の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	49.0	48.1	50.7	0.16
40-49	30.4	31.1	35.8	1.25
50-59	24.5	17.9	11.9	9.96 **
60-69	12.6	4.8	12.5	5.15
70-77	7.3	3.2	10.0	0.84



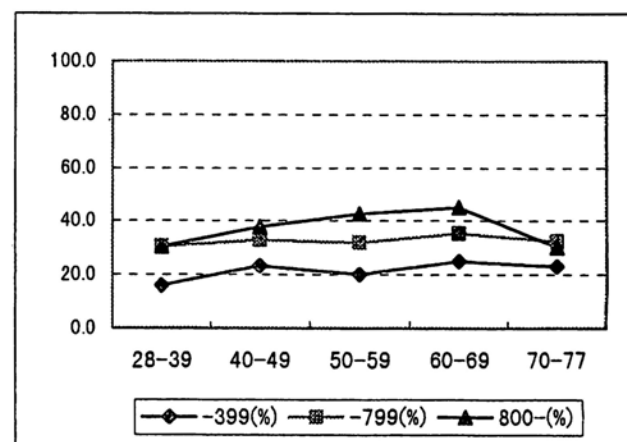
図表-32 女:子夫婦を含めた人 (夫の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	23.8	23.3	29.0	1.02
40-49	44.2	43.3	47.7	0.77
50-59	60.0	58.0	52.5	2.21
60-69	57.5	49.5	50.0	2.42
70-77	67.0	54.8	60.0	1.84



図表-33 女:専門家を含めた人 (夫の年収別)

	-399(%)	-799(%)	800-(%)	Chi-sq.
28-39	15.9	30.4	30.4	11.86 **
40-49	23.2	32.8	37.7	7.31 *
50-59	20.0	31.9	42.5	22.57 ***
60-69	24.9	35.2	45.0	9.36 **
70-77	22.9	32.3	30.0	1.42



見てみよう。図表・26、図表・27、図表・28、図表・29 は男性について、配偶者、親キョウダイ、子夫婦、専門家のそれぞれを介護のネットワークに含めた人の割合を、本人の年収別に見たものであり、図表・30、図表・31、図表・32、図表・33 は女性について同様の分析を、夫の年収別に行ったものである。これらによると、男女とも、学歴による分析の場合とほぼ同じ傾向が見られる。学歴の場合と異なるのは、男女とも、70 歳代の人々（特に、70 歳代になっても 800 万円以上の年収があるという特別に高収入の人々）の、子夫婦と専門家についての結果である。

まず子夫婦について見てみよう。図表・28 に示したように男性では、70 歳代の高収入層で子夫婦をネットワークに含める人が非常に多くなっているが（ただし有意ではない）、学歴による分析ではそのような傾向は見られなかった（図表・14 参照）。同様に図表・32 に示したように女性でも、子夫婦をネットワークに含める人は、高齢の高収入層で横ばいないし若干増加する傾向が見られるが、それとは逆に学歴に関する分析では、女性の高学歴層では 60 歳を過ぎると子夫婦をネットワークに含める人が減少する傾向が見られた（図表・18 参照）。

次に専門家について学歴による分析と比較してみよう。学歴による分析では男女とも、ほぼどの年齢層でも、学歴が高い方が専門家を介護のネットワークに含める傾向が見られた（図表・15、図表・19 参照）。しかし図表・29、図表・33 に示したように収入による分析では、男女とも、そのような傾向は学歴による分析より弱い。特に 70 歳代で専門家をネットワークに含める人は、男女とも、高収入層で他より少なくなる傾向が見られる。

つまり、70 歳代になっても 800 万円以上の年収があるといった特別に高収入の高齢層においては、それより収入の少ない層に比べて、男女とも、介護のネットワークに専門家は含めず、子夫婦を含める傾向が見られた。これは学歴による分析とは逆の傾向である（特に女性において）。ただしこのような人は非常に少ないので（男女それぞれ 10 人）、例外的なものと考えてよいだろう。

ここでの、収入による分析の結果わかったことは、次の 2 点である。

- ①全般的に、学歴による分析とほぼ同じ傾向が見られた。したがって介護ネットワークの年齢差と同様に社会階層の差についても、男性ではその差は小さく、女性では大きいことがわかった。
- ②ただし、70 歳代の特別に高収入の男女においては、子夫婦と専門家について、学歴による分析とは異なる結果が見られたが、これは例外的なものと考えてよい。

(6) 1 人の女性がネットワークに含める項目数は、1 人の男性のそれより多いのか？

ここまでの分析結果は、“全体としての多様性”説を支持するものである。それでは“1 人 1 人の多様性”説はどうだろうか。これを確かめるために、まず図表・34 で、「配偶者」「親キョウダイ」「子夫婦」……といった 7 個の選択項目のうち何個を、1 人の回答者が選

択したか（介護のネットワークに含めたか）を男女別に集計し、その平均個数を計算し、
t 検定を行った。この結果から、確かに女性のほうが多くの項目を選択する傾向があるが、
男女差はあまり大きくないことがわかる。また図表-35 では同様の分析を、「配偶者」を除
いた項目について行った。図表-34 と図表-35 を比べると、図表-35（配偶者を除いた分析）
のほうが、ネットワークに含まれる項目数の男女差は、より大きくなっていることがわ
かる。このことから、男性は〈配偶者だけ〉、あるいは〈配偶者と誰か〉という選択パター
ンが多いのに対し、女性は〈配偶者以外の誰か（と誰か）〉という選択パターンが男性より
多いといえる。したがって1人1人が選ぶ項目数は女性のほうが男性より少し多いに過ぎ
ないが、どの項目を選ぶかというパターンは、男女でかなり大きく異なっていることがわ
かる。

図表 34 介護ネットワークに含まれた項目の個数（男女別）

	0個	1個	2個	3個	4個	5個	6個	7個	合計	平均
男性	48 1.9%	1506 58.4%	629 24.4%	297 11.5%	77 3.0%	12 0.5%	8 0.3%	1 0.0%	2578 100.0%	1.58
女性	57 2.1%	1335 50.2%	701 26.4%	445 16.7%	95 3.6%	21 0.8%	5 0.2%	1 0.0%	2660 100.0%	1.73
合計	105 2.0%	2841 54.2%	1330 25.4%	742 14.2%	172 3.3%	33 0.6%	13 0.2%	2 0.0%	5238 100.0%	t値: -5.6***

Chi-sq. 48.2***

図表 35 介護ネットワークに含まれた項目（配偶者を除く）の個数（男女別）

	0個	1個	2個	3個	4個	5個	6個	合計	平均
男性	1205 46.7%	947 36.7%	324 12.6%	81 3.1%	12 0.5%	8 0.3%	1 0.0%	2578 100%	0.75
女性	617 23.2%	1368 51.4%	537 20.2%	110 4.1%	21 0.8%	6 0.2%	1 0.0%	2660 100%	1.09
合計	1822 34.8%	2315 44.2%	861 16.4%	191 3.6%	33 0.6%	14 0.3%	2 0.0%	5238 100%	t 値: -14.27***

Chi-sq. 325.0***

5. 議論

ここでは今までの分析からわかったことをもとにして、次の5点について論じたい。

(1) 年齢差・階層差が大きい女性と、小さい男性

本稿の分析で最も重要な知見は、介護ネットワークの年齢差や階層差は、女性では大き
く表れるが、男性ではそれほど大きくないという点である。

それではなぜこのような男女の差が生じるのか。それは、次のように解釈できるであろ
う。性別役割分業という支配的なイデオロギーのもとで、男性には介護の担い手としての

社会的期待を背負った妻という存在がいるが、女性にはそのような存在がない。男性には妻という介護者がどの年齢の人にも、どの社会階層の人にもいるため、年齢や階層による介護ネットワークの違いはあまり生じない。男性の中での年齢や階層による様々なライフチャンスの差異は、少なくとも介護に関しては、妻という存在によって解消され平等化されて、その差異は妻である女性に表れるのである。女性には、彼女の介護をするという社会的期待を背負った存在（男性にとっての妻にあたるような存在）がない。したがって女性は、自分の年齢が規定する親族関係の状況（たとえば親はまだ元気か、子どもはもう成長しているか）や、自分が属する階層が規定する様々な状況（たとえば、親は経済的に豊かで頼れるか、介護の専門家を利用するだけの経済的余裕はあるか、福祉関連の官僚制的組織を利用する知識はあるか、福祉を権利としてとらえる文化を持っているか）の中で、それぞれの状況に応じた人や機関を、介護を期待できる人や機関として選んでいるのである。

しかもこのような、夫と妻の非対称性は、親子関係より夫婦関係を強調する規範が強まった現代（笹谷 1999）において、より強まっているのではないだろうか。かつての子世代（特に嫁）が老親の世話をするという規範が強かった時代には、女性にも「嫁」という社会的に期待される介護の担い手がいた。しかし親子関係より夫婦関係を強調する現代においては、嫁に介護を期待することはできず、結果として女性には、「〇〇がしてくれるはず」と無条件に介護を期待できるような相手は存在しなくなった。一方男性においては、夫婦単位を強調する現代ではなおさら、介護を期待する相手は嫁や娘ではなく、妻に集中するのだと考えられる。

(2) “1人1人の多様性”と“全体としての多様性”

第2点めとして、女性の介護ネットワークが男性より多様であることの解釈として、“1人1人の多様性”説と“全体としての多様性”説のどちらが当てはまるのかについて論じよう。本稿での分析から、1人1人が選ぶ項目数は女性のほうが男性より少し多いに過ぎないが、どの項目を選ぶかというパターンは、男女でかなり大きく異なっており、女性では配偶者以外を選ぶパターンが多いことがわかった。しかも女性においては、そのパターンは年齢や階層によって大きく異なっていた。このことから、女性の介護ネットワークの多様性を生み出す仕組みとして、“1人1人の多様性”説と“全体としての多様性”説の両方が当てはまるが、どちらかといえば、“全体としての多様性”説の影響の方が大きいのではないと思われる。

(3) 女性の介護ネットワークの性格づけ——“能力ある”と“不利な”

第3点めは、今まで見てきたような女性の介護ネットワークの多様性をどう性格づけるかについてである。“1人1人の多様性”説にもとづくと、多様な他者に介護を依存できる

ことは、“無力な”ことではなく、そのような関係を築くことができるという点で“能力ある”こととしてポジティブにとらえることができる（大和 1996）。

しかしながら“全体としての多様性”説（すなわち、女性は配偶者に頼れないために、配偶者以外の人に介護を期待せざるをえないが、それぞれが置かれた年齢や階層などの状況によって、誰に期待するかは異なる）によるならば、そのようなネットワークのあり方は、女性の“不利な”社会的位置づけの反映として、ネガティブにとらえることもできる。このように考えるならば、配偶者頼りでない女性の介護ネットワークは、“不利さ”と“能力ある”ことの2つの性格をもっていることになる。逆から見ると、男性が配偶者中心のネットワークを持っていることは、自分を介護してくれる人を社会規範が一応定めてくれているという“有利さ”と、それゆえ配偶者以外の人に頼るための能力を高めることができないという“無力さ”の両方を持っていると考えられる。

(4) 女性の中での介護労働の階層差

第4に、介護を“配偶者に頼れない”ということは、今まで見てきたように女性が共通して置かれている状況である。しかし、それでは誰に頼るのかという点に目を向けると、女性の中に年齢差や社会階層の差があることが分析により示された。特に社会階層については、学歴が高く夫の収入もある程度以上ある女性は、自分の介護に関して、専門家を利用することに積極的であり、子夫婦に介護を頼ろうと考える人が少なかった（特に中高年期以降）。逆に学歴や夫の収入が低い女性は、中年期以降は子夫婦に頼ろうと考える人が多かった。もしこのような介護に関する選好の階層差が、そのまま現実の介護における階層差となるならば、親世代の階層差は、子世代における介護責任の重さの違いとなって表れる可能性がある。それに加えて、「介護は女の役割」という規範が生き続けるとすれば（Finch and Mason 1993）、本稿で見たような介護ネットワークの階層差とジェンダー差が、現実の生活における介護責任の負担となって現れるのは、階層があまり高くない親を持つ子どもたちであり、特にその中でも息子ではなく娘や嫁ということになりはしないだろうか。

(5) ジェンダー差と社会階層の差

このような考察から第5点めとして、介護のネットワークに関しては、ジェンダー差のみでなく、ジェンダー差と社会階層の差を同時に見ていく必要があることを強調したい。特に、公的か商業的かを問わず、介護サービスの利用者が“消費者”と位置づけられ、利用者自身も“消費者”としての意識を高めていくと思われるこれからの時代には、この2つの差に同時に注目することが、これまで以上に必要となるだろう。

6. まとめと今後の課題

本稿で分析したのは、介護が必要という状況を想定してとらえられた、介護のネットワークである。これによると、男性は年齢や社会階層に関係なく、妻を自分の介護者として期待し、一方女性も、若年期においては夫を、そして高齢期においては、階層があまり高くない女性は子夫婦を、階層が高い女性は専門家を、それぞれ自分の介護者として期待する傾向にあった。このことが結果として、女性全体と男性全体とを比べると、女性のほうがより多様な介護ネットワークを持つという現象を引き起こしていると考えられる。そしてこれは、家庭役割は女性の役割とする社会規範のために、女性を介護するという社会的期待を背負った人が存在しないという“不利な”状況に、女性が当事者として対応した結果であると解釈した。つまり、自分の置かれた年齢的・階層的状況に応じて、適当な他者に介護を依存するという“能力”を、女性が高めた結果である。

しかし今日では、高齢者夫婦2人暮らしの増加や、子には世話にならないといった規範が広まっているといわれている(笹谷 1999)。もしそうだとすれば、現実の介護状況を調査すると、夫が妻を介護する例も実際にはかなり多いのではないだろうか。すなわち、現実には誰が介護をしているかということにおけるジェンダー差は、本稿で見たような介護が必要という状況を想定した上でのジェンダー差ほどには、大きくないのではないだろうか。このような介護の実態におけるジェンダー差について明らかにし、本稿の知見と比較することが、今後の課題として残されている。

注

- (1) ①の例としては、Ungerson (1987=1999)、Lewis and Meredith (1988)、Qureshi and Walker (1989)、Leger and Gillespie (1991)、藤崎 (1998; 第5章・第8章) などがあり、②の例としては、笹谷 (1994)、大和 (1996、1997a、1997b、2000)、毎日新聞社世論調査部・アメリカンファミリー生命保険会社 (1993)、野辺 (1999)、春日井 (2000) などがある。
- (2) 介護のネットワークに関する階層の指標として、本稿で用いた方法と、地位優越モデルや地位分有モデルとでは、どちらが妥当なのかを検討することは、今後の課題とする。
- (3) 年齢の区分は、十分なケース数を確保するため、10歳刻みに直した。ただし20歳代後半は特にケース数が少ないため、30歳代と統合した。以下の図表も同様である。
- (4) 図表・16に見られるように、パーセンテージを見ると女性の高学歴層で配偶者を含める人が多いが、統計的には有意差がない。その原因の1つは、女性の学歴の分布が男性に比べて偏りが大きい(特に高齢の高学歴層が少ない) ことにあると思われる。
- (5) 大和 (2000) では、女性では階層が高いほうが専門家を介護ネットワークに含める傾向があるが、男性ではそのような傾向が見られないことが報告されている。これに対して本稿では、男女ともに、階層が高い方が専門家をネットワークに含める傾向が見られ

た（ただし男性より女性において、その傾向は強い）。このような違いが生じた原因として、調査地の違い（大和らによる調査は大都市近郊なのに対し、NFR 調査は全国）や、質問文の違い（大和らは、専門家に関する選択肢を「病院」「ホームヘルパー」「ボランティア」などに分けているが、NFR 調査は「専門家やサービス機関」として一括している）といったことが考えられる。さらに、調査時期の違いも影響を及ぼしているのではないと思われる。大和らの調査は 1995 年に行われたもので、当時は公的介護保険に関する議論がマスメディアをにぎわすということはあまりなかった。一方、NFR 調査が行われた 1999 年は、公的介護保険の導入が既に決まった時期にあたる。「措置から権利へ」といわれるような“専門家による介護”の意味の変化がこの 2 つの時期の間に生じ、それが本稿の調査対象者に影響を及ぼし、その結果として男性の高学歴層で専門家を選択する人が多くなったのではないだろうか。これは 1 つの仮説であり、今後の検証が必要である。

(6) ちなみに図表-23～図表-25 で親キョウダイの線を見ると、その線はどの階層においても年齢とともに低くなるが、その低下の度合いは、中～高等教育終了者（図表-24 と図表-25）においてより急激である。山田昌弘（1999）が示した低成長期以降の親子関係のあり方を考慮に入れると、この調査で親キョウダイの項目を選択した回答者が、介護を頼れる人として実際に思い描いていたのは、兄弟姉妹ではなく親だったのではないだろうか。女性の若年層において、特に階層が中程度以上の人々にとって、親は重要な援助源なのである。

(7) NFR 調査を分析した感想として、調査票に関する検討課題について述べておく。

①年収に関しては、130 万円以上 1000 万円未満の間は、100 万円単位で選択肢を区切ったほうがよいのではないか。

②問 30 の選択肢で、「親」と「兄弟姉妹」は分けたほうがよいのではないか。この両者は、特に階層的地位との関連においては、性格が異なる可能性がある。つまり、階層的地位が高い人は「親」との結びつきが強く、そうでない人は「兄弟姉妹」との結びつきが強い可能性がある。

③同じく問 30 の選択肢で、少なくとも（エ）の介護に関する質問においては、「専門家やサービス機関」を、たとえば公的なものと私的（商業的）なものに分けて見ていくことが、今後は必要になるのではないか。

参考文献

赤川学, 2000, 「女性の階層的地位はどのように決まるか」, 盛山和夫編『日本の階層システム 4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会, 47-63.

Finch, J. and Mason, J., 1993, *Negotiating Family Responsibilities*, London: Routledge.

藤崎宏子, 1998, 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館（特に第 5 章・第 8 章）.

- 春日井典子, 2000, 「介護ライフスタイル」, 野々山久也編『現代家族の変容と家族ライフスタイルの多様化に関する実証的研究』平成 9-11 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 甲南大学, 112-134.
- Leger, F. St. and Gillespie, N., 1991, *Informal Welfare in Belfast: Caring Communities?*, Aldershot: Avebury.
- Lewis, J. and Meredith, B., 1988, *Daughters Who Care: Daughters Caring for Mothers at Home*, London: Routledge.
- 毎日新聞社世論調査部・アメリカンファミリー生命保険会社, 1993, 『93 年高齢化社会全国世論調査報告書』.
- 野辺政雄, 1999, 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3), 375-392.
- Qureshi, H. and Walker, A., 1989, *The Caring Relationship: Elderly People and their Families*, London: Macmillan Education Ltd.
- 笹谷春美, 1994, 「ジェンダーとソーシャルネットワーク——旧炭産（過疎）地と大都市居住の 70 歳男女に関する実証的研究」『平成 5(1993)年度シニアプラン公募研究年報』（財）シニアプラン開発機構, 117-138.
- 笹谷春美, 1999, 「家族ケアリングをめぐるジェンダー関係——夫婦間ケアリングを中心として」, 鎌田とし子・矢澤澄子・木本喜美子編『講座社会学 14 ジェンダー』東京大学出版会, 213-248.
- Ungerson, C., 1987, *Policy Is Personal: Sex, Gender and Informal Care*, London: Tavistock. (=1999, 平岡公一・平岡佐智子訳『ジェンダーと家族介護——政府の政策と個人の生活』光生館.)
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房.
- 大和礼子, 1996, 「中高年男性におけるサポート・ネットワークと『結びつき志向』役割との関係——ジェンダー・ロールの視点から」『社会学評論』47(3), 350-365.
- 大和礼子, 1997a, 「援助ネットワークの広がりとその規定要因——『助け合いの輪』は何によって広がるのか」, 山根・斧出・藤田・大和『家族多様化時代における家事分担の変容可能性に関する調査研究』コープこうべ・生協研究機構, 73-90.
- 大和礼子, 1997b, 「現代の家族とサポートネットワーク」『産業セミナー年報 1997』関西大学経済・政治研究所, 59-82.
- 大和礼子, 1999, 「『集団』としての家族・『組織』としての家族・『ネットワーク』としての家族」『組織とネットワークの研究』関西大学経済・政治研究所研究双書第 112 冊, 11-56.
- 大和礼子, 2000, 「“社会階層と社会的ネットワーク” 再考——〈交際のネットワーク〉と〈ケアのネットワーク〉の比較から」『社会学評論』51(2), 235-250.

(2001 年 3 月 26 日提出)